

科目名	カルチュラル・スタディーズ						
英語科目		ナンバリング	(https://syllabus.kyoto-su.ac.jp/syllabus_search/#n) を参照				
開講期	秋学期	開講学部等	文化学部	配当年次	2 年次	単位数	2 単位
教員名	倉科 岳志, 田中 里奈, 平澤 剛						

授業概要／Course outline

カルチュラル・スタディーズとは、第二次大戦後、イギリスで生まれた新しい文化研究の方法である。正統的で支配的な単一の文化の研究でなく、むしろそれに対抗するポピュラー文化、対抗文化（カウンター・カルチャー）、サブカルチャーなどを研究対象とし、それを権力や伝統との関係においてとらえようとする学問である。

本授業では、このような新しい文化研究の流れと関係のある著作を選んで紹介する。それらを学ぶなかで、被支配者階級、マイノリティ、大衆といった比較的新しい研究対象への視座を養ってほしい。

授業形態、授業方法等／Course form・type

【授業形態】

対面授業

【授業方法】

講義

- ・ ICTを活用した授業（形態：遠隔教育（ビデオ・オン・デマンド等））
- ・ オンデマンド授業を行う。

授業内容・授業計画／Course description・plan

第1回 担当者紹介とカルチュラル・スタディーズへの招待（田中、平澤、倉科）

第2回 ディストピアの思考実験①－家族解体（倉科）

ヨーロッパの思想家たちの著作を解説し、その観点から日本の作家村田沙耶香と伊藤計劃によるディストピア小説を解析する。初回は家族解体をテーマに、M・フーコーの『性の歴史』を読解し、人間の生殖を公的に管理する「生政治」の問題を解説する。そして、そうした政治が実現した社会とはいかなるものか、村田の『消滅世界』『生命式』などを読みながら考察する。

第3回 ディストピアの思考実験②－生命解体（倉科）

G・アガンベンの『ホモ・サケル』から「殺されても罪を構成せず、宗教的犠牲にもならない人間」、「聖なる人」について解説する。そのうえで、この「聖なる人」を選別する基準とは何で、だれがその選別をするのか、現代においてはいかなる存在かなどを考察する。そして、あらゆる人間の生命が平均化された社会とそれを作り出している「人権」の条件を検討し、生命が尊重されている社会とそうでない社会との関係はどうなっているのか、伊藤の『虐殺器官』とともに考え、具体的な対応策を『世界99』から構想する。

第4回 ディストピアの思考実験③－意思解体（倉科）

H・アーレントの『人間の条件』と『エルサレムのアイヒマン』などから「労働」、「活動」、「社会」、および「悪の陳腐さ」の概念などを解説する。そして、「労働」が最優先された「社会的領域」が完全展開され、安心・安全で社会が実現し、快楽が最適化された社会の先には何が待っているのか、伊藤の『ハーモニー』を読みながら考察する。

第5回 ディストピアの思考実験④－知識解体（倉科）

P・レーヴィ『溺れる者と救われる者』などを読み、全体主義体制における自己正当化の論理、および実際に大多数の人が含まれた「灰色の領域」という概念について解説する。そして、人間の意思と知識の関係について検討し、テクノロジーが発達した現在において知識の平準化がいかに展開されるのか、村田の『半変身』などを読みながら考える。

第6回 オリエンタリズムと舞台芸術①

私たちは特定の国・地域に対してイメージや先入観を持ちがちであり、それを日常的に消費し、評価し、無自覚に再生産している。このイメージは文化や芸術、大衆的なメディアなどを通して拡散・強化されてきた。この回では、エドワード・W・サイードの「オリエンタリズム」という概念を手がかりにして、舞台芸術（演劇・音楽・バレエ・ミュージカルなど）を取り上げ、各作品の今日におけるパフォーマンスがいかなるイメージを生み出しているのかを考えていく。

第7回 オリエンタリズムと舞台芸術②

前回から引き続き、サイードのオリエンタリズムを手がかりにして、舞台芸術（演劇・音楽・バレエ・ミュージカルなど）の政治性を取り扱う。この回では芸術活動に焦点を当てる。今日の芸術制作・上演・鑑賞において、アーティストの出身地や活動拠点、パフォーマンスする場所などの要因がいかなる権力関係や評価の非対称性を生み出しているのかについて考え、私たちが無自覚に抱いてきた（または抱いてすらいなかった）イメージをアップデートしていく。

第8回 文化産業としてのミュージカル①

ここまで現代における芸術作品・活動を論じてきたが、この回から経済・制度面に視点を移したい。私たちの身近にあるポピュラーカルチャーは、文化であると同時に商品でもある。例えばミュージカルは制作・流通・評価の

サイクルが近代までの芸術の枠組みと異なるため、ポピュラーカルチャーに位置づけられてきた。この回では、アドルノ & ホルクハイマーの「文化産業」という概念を手がかりにして、ミュージカルの文化とビジネスという両義性について、市場の内側に生きている私たちの立場から考えていく。

第9回 文化産業としてのミュージカル②

前回から引き続き、アドルノ & ホルクハイマーの「文化産業」を手がかりにして、ポピュラーカルチャーの経済性と制度面を取り扱う。この回では、クリエイティブ産業に代表されるポピュラーカルチャーの再評価や政治化、予算確保に向けた制度面での官民共同の取り組みなどが、ミュージカルをどのように変えたのかを紐解き、各地の制度が私たちの文化・芸術活動に及ぼす影響について考えを巡らせたい。

第10回 日本における文化研究①—前史としての前衛芸術論—（平澤）

日本における文化研究は、戦後に制度化される以前から、批評や芸術実践のなかで準備されていた。戦前から戦後にかけて活動した花田清輝の前衛芸術論を日本における文化研究の前史として位置づけ、文学、芸術、政治を横断する思考が、いかに戦後日本の文化論へと接続されていったのかを検討する。

第11回 日本における文化研究②—大衆文化論—（平澤）

1950年代から1960年代を中心とする鶴見俊輔による大衆文化論を、日本における文化研究の形成過程と捉え、思想、文化、日常生活を横断する鶴見の議論を通して、「大衆」や「生活」の経験がどのように批評や思考の対象として捉えられていったかを考察する。

第12回 日本における文化研究③—映画とメディア—（平澤）

1960年代後半から1970年代にかけて展開された松田政男、および津村喬による映画論、メディア論を取り上げ、映画を単なる芸術表現として、またメディアを中立的な情報伝達手段として捉えるのではなく、政治的、思想的文脈のなかで再定位する文化批評的、理論的試みを再考する。

第13回 日本における文化研究④—ニューメディア以降—（平澤）

本回では、1980年代以降のメディア環境の劇的な変化を背景に、粉川哲夫によるメディア論や批評を媒介に、知覚や身体、文化的経験がメディアの変容を通じてどのように再編されてきたのかを、同時代に開始されていった日本文化研究の学術的枠組みと比較しながら検証する。

第14回 臨時試験／授業の総括・補足・まとめ（田中、平澤、倉科）

★オンデマンド授業：各担当者による担当回の総括と補足、臨時試験の内容と方法についての解説（田中、平澤、倉科）

※オンデマンド授業の配信時期については授業内およびmoodleで周知する

※授業内容は一部変更する場合がある。

事前・事後学修／Preparation and assignments

※原則として、事前学修は各授業2時間、事後学修も各授業2時間必要である。下記の内容を確認し、しっかりと取り組むこと。

第1回 担当者紹介とカルチュラル・スタディーズへの招待（田中、平澤、倉科）

【事前学修】シラバスをよく読む。

【事後学修】学期全体の流れを把握する。

第2回 ディストピアの思考実験①—家族解体（倉科）

【事前学修】「ディストピア」「家族」「ミシェル・フーコー」を辞書や百科事典で調べ、文章にまとめる。

【事後学修】授業内容を理解しまとめる。

第3回 ディストピアの思考実験②—生命解体（倉科）

【事前学修】「人権」「生命」「人間」「ジョルジョ・アガンベン」を辞書や百科事典で調べ、文章にまとめる。

【事後学修】授業内容を理解しまとめる。

第4回 ディストピアの思考実験③—意思解体（倉科）

【事前学修】「意思」「自由」「ハンナ・アーレント」を辞書や百科事典で調べ、文章にまとめる。

【事後学修】授業内容を理解しまとめる。

第5回 ディストピアの思考実験④—知識解体（倉科）

【事前学修】「真理」「プリーモ・レーヴィ」を辞書や百科事典で調べ、文章にまとめる。

【事後学修】授業内容を理解しまとめる。

第6回 オリエンタリズムと舞台芸術①（田中）

【事前学修】自分が「異文化っぽい」「エキゾチック」と感じる舞台・音楽・表現は何かを考えてくる。そのイメージは、どこで学んだ／刷り込まれたと思うか、それを「問題だ」と感じたことがあるか／ないかを考える。

【事後学修】授業で配布した資料や講義のパワーポイント、自分で書いた講義ノートを参照し、授業の内容、扱った作品について理解を深める。

第7回 オリエンタリズムと舞台芸術②（田中）

【事前学習】「舞台芸術」と聞いて思いつく作品を最大10種挙げ、それらの作者・舞台設定・演者（演奏者）の主な出身地などを調べる。

【事後学習】授業で配布した資料や講義のパワーポイント、自分で書いた講義ノートを参照し、授業の内容、扱った作品について理解を深める。

第8回 文化産業としてのミュージカル①（田中）

【事前学修】自分がお金・時間・労力を最も使っている文化をひとつ挙げ、それが「芸術」か「娯楽」か、あるいは

は両方かを考える。また、公的な支援や経済的な市場がなくてもそれが成立すると思うかどうか、思考を巡らせる。

【事後学修】授業で配布した資料や講義のパワーポイント、自分で書いた講義ノート参照し、授業の内容、扱った作品について理解を深める。

第9回 文化産業としてのミュージカル②（田中）

【事前学修】自分がお金・時間・労力を最も使っている文化をひとつ挙げ、それが「芸術」か「娯楽」か、あるいは両方かを考える。また、公的な支援や経済的な市場がなくてもそれが成立すると思うかどうか、思考を巡らせる。

【事後学修】これまでの全4回の授業で配布した資料や講義のパワーポイント、自分で書いた講義ノート参照し、授業の内容、扱った作品について理解を深める。

第10回 日本における文化研究①—前史としての前衛芸術論—（平澤）

【事前学修】花田清輝『花田清輝評論集』（岩波文庫）、および「前衛」「前衛芸術」という概念について調べておく。

【事後学修】授業内容に則して、参考文献などを活用しながら要点をまとめておく。

第11回 日本における文化研究②—大衆文化論—（平澤）

【事前学修】鶴見俊輔『限界芸術論』（ちくま学芸文庫）、および「大衆」「大衆文化」という概念について調べておく。

【事後学修】授業内容に則して、参考文献などを活用しながら要点をまとめておく。

第12回 日本における文化研究③—映画とメディア—（平澤）

【事前学修】松田政男、津村喬の映画論、メディア論、および「メディア」という概念について調べておく。

【事後学修】授業内容に則して、参考文献、映像などを活用しながら要点をまとめておく。

第13回 日本における文化研究④—ニューメディア以降—（平澤）

【事前学修】粉川哲夫のメディア論、および「ニューメディア」という概念について調べておく。

【事後学修】授業内容に則して、参考文献、映像などを活用しながら要点をまとめておく。

第14回 臨時試験／授業の総括・補足・まとめ（田中、平澤、倉科）

【事前学修】解答する内容をしっかり把握する。

【事後学修】解答内容を振り返り、自己評価にまとめる。

★オンデマンド授業：各担当者による担当回の総括と補足、臨時試験の内容と方法についての解説（田中、平澤、倉科）

【事前学修】3名の担当者による授業内容を振り返り、論点をまとめる。

【事後学修】解答内容を自分なりにまとめる。

授業の到達目標／Expected outcome

- ・各担当者が取り上げる著者およびその著作、新たに切り開かれた視点を深く理解し、現代の諸事象を把握・分析し問題提起できる。
- ・「ディストピア」「オリエンタリズム」「文化産業」「前衛芸術」「大衆文化」「メディア」「ニューメディア」に関する研究や言説を正確に理解し、現代的な文脈でとらえ直すことができる。
- ・小説、舞台芸術、映画を様々な視点から批判的に読み解き、自身の考えを述べられる。
- ・「家族」「意思」「生命」「知識」について批判的に考察し、自分の考えを述べるられる。
- ・「文化」と「権力」または「文化」と「政治」の関係について理解を深め、自分なりの考えを述べられる。

身につく資質・能力／Competencies to be attained

- ・思考力
 - 専門知識・専門技能
 - 【文化学部 国際文化学科】
 - ・人文学に関する知識
 - ・異文化間の課題を解決する能力

履修上の注意／Special notes, cautions

- ・配布された資料はよく予習してくること。
- ・普段から社会現象に関心をもつこと。
- ・試験はあらかじめ指定した教室と場所にて対面で行う。
- ・単位は上記方法以外では認められない。
- ・試験時間に試験場に来られない場合、体調不良・病気も含め、原則再試験は行なわない。
- ・例外として交通機関のトラブルで遅延証明がある場合は対応する。
- ・追試験の条件は本学定期試験の規定に準ずる。
- ・本授業では、学術的探究と自由な議論を促進するため、多様な視点や意見を取り上げる。そのため、性や暴力、グロテスクな表現、または歴史的・社会的に議論のあるテーマや差別的な表現が教材に含まれる場合がある。これらの内容は批判的考察を目的とするものであり、不快感を与える意図はない。授業では、必要に応じて適切な配慮や説明を行なうが、自由で率直な議論を保障することを重視する。本科目を履修登録することは、この方針を理解し、学術的な文脈でこれらのテーマに向き合う意思があるとみなされる。特定の内容に関して懸念がある場合は、担当教員に事前に相談すること。

評価方法／Evaluation

- ・臨時試験１００％。

教 材／Text and materials

- ・各担当者より、随時レジュメ等の資料が配布される予定である。
- ・参考文献は、各担当者より授業内で随時紹介する予定である。

質問や相談の方法／Instructor contact

- ・各担当者の研究室・オフィス・アワー：moodle記載の情報を確認すること。
- ・各担当者の連絡先：moodle記載の情報を確認すること。
- ・授業に関する質問や相談などがある場合はオフィス・アワーとして指定された日時に研究室を訪問するか（あらかじめアポイントを取ることが望ましい）、メールにて質問する。なお、メールには件名に所属学部、氏名、用件を必ず示すこと。件名がブランクの場合、迷惑メール扱いとなり、読まないこともある。